



外国人の子どもたちに対する学習サポート事業

外国人児童生徒に対する留学生等（日本人学生を含む）ボランティアによる学習支援等サポート事業の実施について

（財）兵庫県国際交流協会協力課長 新木 八郎

経緯

兵庫県内では、在住外国人の増加に伴う外国人の児童生徒（以下、子どもたち）の増加が見られ、統計的にも平成一六年度の文科省調査によれば七八一人の子どもたちに日本語の支援が必要であるとされています。

義務教育の段階で、ある程度の年齢になって日本にやって来た子どもたちの一部は、言葉や習慣が分からないために、学校での学習にもついていけず、学校や地域で孤立化する傾向にあります。さらに日本で滞在期間が長くなるにつれ母文化・母語を忘れ、親とのコミュニケーションが取りにくくなり、非行に走ったりするなどの社会的な問題も起こってきていて、これらの問題に対応するためには、日本語・母語・教科学習支援などを一体化した総合的な支援が必要であり、地域において新たな対策が求められるようになってきています。

事業の取組み

(1) 神戸地区（主に中国人児童生徒の支援）

実施団体名	NKSC ニューキッズサポートクラブ
活動場所	神戸研究学園都市大学 交流センター
参加学習者	12人
支援者	留学生（中国）14人 日本人学生10人 社会人9人
活動時間	毎週土曜日 10:00～12:00

そこで、（財）兵庫県国際交流協会ではこのような問題を解決するモデル事業として、学習支援、母語、日本語のすべてをカバーできる留学生等（日本人学生を含む）のボランティアを活用した、子どもたちへの学習支援等サポート事業を、一七年度C L A I Rの助成をいただきながら企画し、取り組んできました。

＜活動内容＞

- ・登録された留学生、日本人学生等が学習者に対してチームを組み、交代で希望する教科をマンツーマン形式で教えている。
- ・日本生まれの中国人の児童に対し、訪問で母語支援を行っている。
- ・外国人生徒対象の高校進路ガイダンスに通訳派遣などで参加。
- ・日本の高校への編入、転入を目指す生徒への日本語、学科の指導。

＜取組状況＞

学習に参加している中国の子どもたちは基本的に勉強熱心で、進学目標もあり熱意が感じられる。また、教科内容により



↑楽しく勉強中

国語、古典、社会などは日本人学生が担当するなど、留学生と日本人学生のチームによる指導は効果的で、学生と子どもたちとの間の雰囲気もよく楽しい教室開催となっている。

(2) 姫路地区(ベトナム人児童への支援)

実施団体名	城東寺子屋
活動場所	姫路市城東町総合センター
参加学習者	8人
支援者	留学生2人 日本人学生6人 研修生等2人 その他社会人5人
活動時間	毎週土曜日 13:30~15:30

〈活動内容〉

中学生以上の学習者について、日本生まれの子どもたちに学習支援を、来日して間もない子どもたちに日本語支援をマンツーマン方式で実施している。母語支援はベトナム人留学生が地域的に不在で、企業研修生やベトナム語のできるボランティア



↑暑さに負けず

が支援してくれている。

〈取組状況〉

日本生まれのベトナム人の子どもたちは、進学目標もはっきりしており、熱心に勉強を続けた結果、受験を目標としている子どもたちは全員高校進学を無事に果たした。日本語支援も生活言語を中心に、少しでも早く日本での生活に慣れることができるように熱心に授業が行われており、成果を挙げている。

(3) 翻訳教材の開発

〈実施団体〉

兵庫日本語ボランティアネットワーク内多言語教材作成グループ「わくわく会」八言語(日本語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、タガログ語、ベトナム語、韓国・朝鮮語、英語)

翻訳教材は国語、数学、理科の教科副読本として活用できるものを作成していて、小学三〜六年生の内容をカバーしている。

開発した翻訳教材については、教育委員会を通じて学校教育現場で積極的に利用を図るとともに、地域で子どもたちを支援しているNPOなどへ周知し、利用促進を図る。また、研究会などで使用の実践を説明することとする。

今後の課題

実施して分かったことは、子どもたちのキャリア、要望は千差万別で、取り組むべ



↑TVの取材に答えて

き対応も異なっているため支援内容も変わってくることで、支援を行える子どもたちは勉強に取り組む姿勢がはっきりしていて、意欲もあるが、不登校など現実に社会問題となつていく子どもたちを勉強させることで集めるのは至難の業で、また、仮に参加してもらってもほかの学習者とのギャップがあり、不協和音を引き起こすなど雰囲気が悪くなり、ボランティア活動も対応できない状態となってしまうことです。

そういう状況を改善させるには、すべての子どもたちが自由に集まり、何らかの支援を受けることができる居場所づくりのような事業を実施し、その中で本当に勉強をする意欲のある子どもたちを、さらにステップアップするような支援ができるような体制を作り上げることが望ましいと考えられます。